



昭和4年11月20日に御親閲を賜りたる茨城、栃木、群馬県男女青年団及び在郷軍人(上、『昭和四年陸軍特別大演習記念アルバム』より転載)。水戸市渡里に昭和5年4月に建立された「賜閲 健兒壹萬野營之跡 侍従長鈴木貫太郎書」の碑(右)



陸軍特別大演習と土浦中学生 3

1929(昭和4)年11月15日から17日までの陸軍の特別大演習、18日の観兵式を終えられた昭和天皇は、19日から3日間の地方巡幸に入られ、20日午後には堀原練兵場での親閲式に臨まれました。今回は土浦中学生たちの土浦駅での奉迎、霞ヶ浦海軍航空隊への提灯行列、御親閲前夜の野営での様子とその感激を綴っていきます。文中の【 】内は筆者による注記です。

昭和天皇行幸日程2(11月19日)

宮内大臣一木喜徳郎が枢密院議長倉富勇三郎に宛てた文書(宮発第653号)

十一月十九日

午前八時 行在所【茨城県庁】

御出門

同 八時五分 水戸驛御發車

同 九時五分 土浦驛御着車

霞ヶ浦海軍航空隊へ行幸

官幣大社鹿島神宮御參拜

行在所 霞ヶ浦海軍航空隊

土浦駅での奉迎(11月19日)

11月19日、土浦中学3年生以下の生徒【4、5年生は20日に御親閲を受けるため水戸に向かいました】、女学生、青年訓練所員、青年会員、在郷軍人や若男女の土浦町民は、霞ヶ浦海軍航空隊へ行幸される陛下を奉迎しようと、早朝から霜を踏んで土浦駅前に集まってきました【土浦中学生は午前6時40分に校庭に集合、同7時20分土浦駅前に整列】。この奉迎の様子を1年生の松岡喜久男(中33回)は「進修第31号(1930・昭和5年3月1日発行)『陛下を奉迎して』」に次のように記しています。

「壯麗な奉迎門、美はしく修繕せられた驛の表口には高く國旗が翻つてゐます。いかめしく警戒する巡查や憲兵はひつきりなしに往來し奉迎者の列をなほしてゐる。かくて午前八時の時の響を合圖に交通は全く遮断せられ森嚴の氣分に充ち渡る奉迎の用意は出来ました。早や午前九時十五分前になり御差し廻しの自動車や其の他、供奉の自動車が二三十台も整列する。もう石岡邊りお通

過だらう。或は高濱邊までいらせられたかも知れない。有資格者や高齢者も席におつきになつた。

もう間もない、早や指導列車も着きました。私共の胸は高鳴がします。時は刻一刻とせまり白い煙をはいてじゆうじゆうじゆうと音がして靜かに御召列車はプラツトホームに現はれました。菊花の御紋章まばゆいばかりに。時正に九時五分。

其の時のいかめしき、神々しき、尊さは何ともいひ様がありません。陛下にはプラツトホームから進ませられ文武百官の敬禮を受けさせ給ひつつ御召の自動車に御乗遊され龍顔美しく御微笑を浮べさせて、鈴木侍従長【鈴木貫太郎、後に1945年4月7日から同年8月17日まで第42代内閣総理大臣を務め、太平洋戦争を終結へと導いた】と相對されて一同最敬禮をして居ます前を御通過なされました。四方はオートバイで御警備申し上げ、天皇旗は上覆がされてありました。自動車にて御供申し上げます文武の高官が多數肅々と従ひまするかしこさ筆紙の及ぶ所でありませぬ。今日こそ天顔を拜する事が出来ました榮えある日であると、私は思はず涙ぐみました。」

また同じく1年生の山本武義(中33回)は「進修第31号・陛下を奉迎して」に奉迎の感激を次のように記しています。「十一月十九日我々は我が土浦に陛下を奉迎するために驛前の道路の南側に整列した。北側には町の有志の人々を初めとして各青年團等洋服和服の人々が堵列してゐる。やがて御召列車は光榮に輝く我が土浦驛に着御遊ばされた。と同時に前驅が走り出す。あたりは一色の動

くものも何一つの音もなくひつそりと靜まりかへつてゐる。

【昭和天皇が土浦駅に到着し】「禮」の号令に【我々の頭は皆大地にひきつけられるやうに下る。ああこの時こそは胸裡に何の考へもなくただ畏さのあまりにひとりでに下る頭でありました。『直れ』の號令に頭を上げやうとしたがまだ拜さぬ陛下の威嚴さにうたれたためか全身が緊張して容易に上らない、何か重いものでおさへつけられてゐるやうに。

前驅の過ぎた後や、しばらくしてからもいかめしい武官方に前後左右をまもらせられて肅々として奉迎門より出御遊ばされたオレンジ色の御車、その中央に天顔御麗しき 聖上陛下が從容として畏くも我等に御答禮し給ふその御姿の尊さ神々しき、あ、この時の光景は如何なる畫伯も畫くことが出来なく如何なる文豪も畫き表すことができなうであらう。この言語に絶した光景はこの時此所に臨んだ人のみが拜することのできる尊さでありませう。

御車は車をこぼすやうにはらはらと人々に恵を時いて過ぎて行きました。常盤木を縫ひ合せる紅葉濃き十一月十九日、陛下を奉迎した神々しいこの光景は永久に我等の腦裏から消え失せぬ印象でありませう。」

昭和天皇は皇太子時代に2回、霞ヶ浦海軍航空隊を訪れ、隊内の施設をご覧になつていますが、今回はその後の新施設や飛行機・飛行船の整備作業を視察、ツエッペリン伯号を收容した大格納庫にも入られ、N3号飛行船の代船として建造された国産3式飛行船(半硬式飛行

船に乗船して、航空隊司令の説明を受けられました【霞ヶ浦海軍航空隊の飛行船や大格納庫については本紙第69、71号で紹介していますが、これらはHPでもご覧いただけます】。その後陛下は、午後0時30分、航空隊水上班の棧橋からお召し艇に乗船され牛堀に向かわれました。その間、上空では海軍水上機の編隊飛行、爆弾投下、魚雷発射などの訓練が行われていました。午後2時5分牛堀棧橋着、自動車にて鹿島神宮に向かい、参拝、宝物などを天覧後、午後5時、行在所の霞ヶ浦海軍航空隊に帰着、新築された士官宿舎で「宿泊になりました。近郷の住民は、提灯行列を行って行幸をお祝いし、土浦中学でも「夜間ハ学校近在学生ヲシテ提灯行列ヲ行ヒ霞ヶ浦航空隊行在所前ニ到リ九時二十分萬歳ヲ奉唱シ解散(学校沿革誌)」しました。



御親閲諸団体野營の一部(左上)。昭和4年11月19日天覧を賜りたる霞ヶ浦海軍航空隊水上班(右下、いずれも『昭和四年陸軍特別大演習記念アルバム』より転載)

野營 (11月19日、20日)

栄えの御親閲を受けるため土浦中学4・5年生は前日から行動を開始しました。生徒たちは19日に学校を出発、水戸堀原練兵場近くで野營をし、御親閲に備えました。その野營の様子を5年生の伊藤繁雄(中29回)は「進修第31号・御親閲記」で次のように記しています。

十一月十九日午前五時銃器庫前に集合せる二百六十餘名の中、我々四拾名近くの先發隊が先づ出發した。その朝は始めて霜が降つて可成り寒かつた。露營地【東茨城郡渡里村、現水戸市渡里】へついたのは七時過ぎである。露營地は【歩兵第2聯隊の】兵營の裏の麥畑で、麥は一二寸延び荒らすのが惜しいやうに思はれた。我々は野營第一大隊第一中隊で、需要品の支給其他に大層便利な地位【場所】だったので誠に好都合であつた。

先づ野營に關する物品の配給を受けた。藁、むしろ、竹などである。此の時水海道中學は先發隊を出してゐなかつたので、我々が海中【水海道中】の分まで運んでやらねばならなかつた。然し我々は能くその任を果たして休息して本隊の來るのを待つた。

【櫻井校長、渥美少佐、遠藤、高塚、大豆生田、朝井諸先生に引率された】本隊がついたのは十一時頃であつたらう。やがて晝食命令が下る。各々徐ろに辨當の包みを開く。笑ひ聲がひびく。めいめい土浦と書いた白布を付ける。晝休約一時間。それから天幕材料配給があつて、銘々分擔して幕舎及び便所の構成【構築】が始まつた。幕舎及び便所は各六つ作るであつたが各人一致協力して働

いたので他の何處よりも早く出來上つたのは嬉しかつた。間もなく炭、蠟燭、燈籠なども配られてこれで野營の準備がすつかり出來上つたわけだ。

見渡せば中學、青訓【青年訓練所】の天幕は或は林の間に或は桑畑の陰に隱見【見え隠れ】して蜿蜒【延々】と續き、幕舎の數は三百餘、而して之に宿る若人約一萬、此が皆新興日本の意氣を代表するものであり、光輝ある我が帝國の擁護者であると思ふと妙に懐かしい頼もしい氣がしてならなかつた。

午後三時頃 天皇陛下より特別の思召を以て、御派遣せられた侍従がお出になつて我々の野營地を視察せられた。そうして今夜は我々と共に野營されるのだと言ふことを聞いて、今更ながら皇恩の厚きに感泣した。

夕刻になると各天幕に入り、眞中に作られたる爐に炭をおこし暖を取り、それを圍んで夕食を食べる。百目蠟燭が灯される。外に出て見ると各幕舎の燈籠の光は行列のやうに並んで空の星と相映じ實に美しい。時々ドンと音がして青白い光がさつと流れる。寫眞撮影である。

午後七時 高松宮殿下が我が野營地を御視察にお出になつた。我々は道に沿うて整列してゐる。間もなく軍樂隊の君が代の奏樂があり、其後 高松宮殿下には若干のお附きの者を従へさせられ、目迎する我々に擧手の禮を賜りつゝ、靜々とお歩みなされる。殿下を數歩の所に拜顔し得た我々は重ね重ねの光榮に感激して措く處を知らなかつた。

午後九時人員點呼がありそれから一同幕舎に入り寝に就いたが、寒くてとても眠られそうもなく、皆起き出して爐の

側に丸く座つて様々な無駄話に時を費す。然しその中にそろそろ眠くなつてゴロゴロ横になり、果はグーグー鼾をかき出す者もあつた。然し間もなく寒氣の爲に目を覺され、再び爐に暖まるのだつた。従つて一時間交代の不寝番は殆ど無用であつた。いつも十五人位は爐の側にゐるからである。寒さの爲にせいぜい一時間二時間位しか眠れないのだから堪らない。

夜が明ける。今朝は炊出だ。炊事當番は三時に起き出して炊事場に行つた。實際勤務中で炊事當番位忙しいものはない。飯を炊く。汁を煮る。全く不馴の連中がやるのだから旨く行く筈がない。忽ち飯が焦げる。しかし其處が野營だ。天幕生活の妙味はこゝにあるのだ。不自由は始めから覺悟の前である。

飯が出來ると各幕舎から二人の飯湯當番が出て、飯や汁や香物を持つて來る。それを皆が分けて楽しい朝飯にありつくのだ。

午前六時人員點呼。八時集合して銃器や服装を整へ晝食のパンを腰にしていよいよ野營地を出發した。今日の晴の御親閲に胸をおどらせながら……。

茨城・栃木・群馬3県下1万余名の青少年の幕營を、昭和4年11月13日付けの朝日新聞は「第1次世界大戦中にアメリカ陸軍の1聯隊が砂漠で幕營を試みたことがあるが、今回の如き大がかりな訓練を目的とした幕營は最初のもので、陸軍を始め各方面から興味をもつて見られてゐる。」と報じていましたが、若人たちは元氣いっぱい幕營生活を送り、御親閲への緊張と喜びに、眠れぬ一夜を明かしました。(高21回 松井泰壽)